# 川の音がかすかにする

草壁焰太五行歌集

市井社

川の音がかすかにする

# はしがき

この五行歌集については、書くことがない、またなにも付言すべきでないというのが、正直な心境である。

それでも、人に読んでいただく以上は、あいさつの言葉は必要であろう。

まず、この本のもつ重さ、激しさについて、ただ申しわけないと思う。だが、また、私自身はもっと重く、苦しくなくてはならなかったのではないかとも思う。

このように、自分の性格が自分の運命に付与した事実を、そのまま転写するように詩歌を書くということは、予想もしていなかったことであった。

いままでは、感興が起こって書く、発酵を待って書くという感じだった。予想を覆すような人生の転変もあったが、それはなんとか受け止められるものであった。今回の事は、そういう性質のものではなかった。このため、この歌集の中心となる詩歌は、自分がローラーのように転がされていくと、そこに転写されているという感じだった。

この息子のことについて、多くの方が、同じ質問をされる点についてのみ書くとすれば、享年は二十一歳、平成五年六月の出来事であった。また、幼いころ、私の育てていない息子であった。

弁解はなにもできぬ。私が悪かったというしかない。一方、十八歳以降は私のところへもよくきて、私のことは格別に信頼してくれていたように思うから、なんとかできる時機もあったと今は悔やまれる。

自分が、この手で、この息子をダメにするという気迫を欠いた。

この五行歌集は、息子の事件に関わる第一部「川の音がかすかにする」と、その前後の歌を集めた第二部「後(のち)の旅」の二つに分かれている。第一部には、『心の果て』に含めた一首を再収録した。

第二部は、それ以前のものも含むが、ほとんどは第一部の影響下に書いたもので、実際には私の気持ちの中で渾然一体となっているものであるが、読み手にはすこし違って見えるかもしれない。もうすこしつらい歌も二、三十あったが、第一部を読んだあとでそれを読むと、私自身たまらないような気分だった。

あまりにも救いがない。読まれる方にも滅入ってしまう方があるかもしれないと思い、それらを省いて、やすらぎのある歌をいくらか多めにした。それがよかったかどうかはわからないが、この間二、三千に及ぶ歌の平均の感情とすれば、第二部はこのあたりが妥当と考えたのである。

『心の果て』を刊行して後、平成六年四月に、かねて念願としていた五行歌の会を発足させることができ、『五行歌』を毎月刊行して、ちょうど半年になる。

大変に秀れた五行歌人たちが、全国から集まり、たちまち質の高いグループとなったことを、私は誇りに思っている。

いままで、五行歌という形式は、一つの提案であったが、新しく始めた人々の作品によって、一つの形式として確立したように私は感じている。関心をもたれる方は、作ってみていただきたい。

また、五行歌を書く人も増えてきたので、この七月に『五行歌を始める人のために』を市

井社から刊行した。作ることに関心のある方は、お読みいただきたいと思う。

歌集の作り方は、『心の果て』を踏襲することにし、目で見る変化のためにもと拙い自筆の歌も入れることにした。それらが、一個の瓢箪や茄子のように自然なものになってくれればと思うのは贅沢であろうか。

第一部の作品は、書くことがためらわれたが、それだけの思いをかけて対決すべきだという内心の声もあり、あえて筆先にしてみた。二、三、手の震えたものもあったが、不思議な精神作用で、ほかの歌を静かな心境で書くようになっていた。

日常のためにも、五行歌の活動のためにも、この歌集を作るためにも、多くの方のお世話になった。兄弟、友人、知人、同じ心をもつ歌友の存在なしに、私自身も、このような活動もありえない。深く、深く、感謝する。

最後に、永年の詩歌の友、五行歌人の山口良昭氏と柳瀬丈子氏に、懇切な文章を頂くことができた。自分の詩歌をかくまで深く読んでいただけたことは、まことに有り難い。

平成六年九月二十六日午前

草壁　焔太

# 目次

はしがき　2

第一部　川の音がかすかにする

Ⅰ　10
Ⅱ　18
Ⅲ　31
Ⅳ　39

第二部　後（のち）の旅

花の天蓋（てんがい）　52
親老いる　60
ばらんばらん　67
舟　72
温泉　76
若葉・嵯峨　80
人影　91
末息子　95
秋空　100

駅　112
家は雲の中　117
九十九里　127
友　133
仕事　137
後(のち)の旅　143

「川の音がかすかにする」と「心の果て」の間で　山口良昭　152
哀悼「川の音がかすかにする」　柳瀬丈子　160

自筆五行歌索引　164

装丁　森山啓子

# 第一部

# 川の音がかすかにする

I

息子の発狂が
なんだと
闇に笑ったが
背筋は
ぐーらぐら

強制入院させるため
息子と
揉み合う
初めて教える
父の腕ぢから

狂った息子を
病院に入れる
ハタリハタリと
機(はた)の音の
聞こえるような日

息子が
揮うかもしれない
暴力と
麻酔をかけて
入院させる暴力と

狂った息子の
医師に反抗する姿が
私そっくり
まるで
銅貨の裏表のよう

息子を
精神病院へ
入れてきた
自分の裏側を
見捨てるように

息子よ
笑顔が
私に似ているという
息子よ
麻酔にかかっている

息子が
狂ったことは
真実
自分の
一部のように思われる

お地蔵さんを見ると
狂った
息子を思いだす
のんびり
日向ぼっこでもしてろや

狂った息子は
お地蔵さんのよう
よいものを
貰ったのだと
思え

街で見る狂人に
にっこり
笑いかけられるようになった
息子が
狂ってから

「慈しむ」
という言葉が
いまの私の心を
一番
ほっとさせる